

「会議」のマネジメントーゴミ箱モデルを超えてー

東京大学大学院経済学研究科 修士課程：稲水 伸行

あいまい性下の意思決定のモデルとしてゴミ箱モデルがある。これは、コーエン、マーチ、オルセンらによって、1972年に提唱された。そこでは、選択機会、問題、解、意思決定者が比較的相互に独立した流れを持っており、そのような状況下では意思決定は必ずしも問題を解くわけではなく、「やり過ぎ」「見過ごし」による決定もあることが示されたのである。

しかし、人々は山積した問題を前に、独力で解こうとしたり、単にやり過ぎたりするだけなのであろうか。この点、コーエンらのゴミ箱モデルをベースにコペンハーゲンのある学校における教育機構改革の事例を紹介した Kreiner(1976)の事例は興味深い。Kreiner(1976)によれば、確かにその決定プロセスは、様々な選択機会に問題や意思決定者たちが自由に出入りしており、ゴミ箱モデルの様相を呈していたのである。しかし、そのような中であって、各参加者たちは、問題や意思決定者の流れを何とかコントロールして、有利な意思決定状況を作り出そうとしていたのである。

本稿では、この Kreiner(1976)の事例に着想を得て、ゴミ箱モデルにいくつかのルールを付け加える形で、「会議」マネジメント・モデルを構築した。このモデルでは、基本的には選択機会、問題、意思決定者が比較的独立した流れを形成している。しかし、その一方で、問題や意思決定者がどの選択機会に入ることができるのか、というアクセス構造を変化させることで、各参加者が問題や意思決定者の流れをコントロールできるようになっている。その結果、問題を丸投げしたり、回したり、助けを呼んできたり、他の事はそっちのけで問題に取り掛かったりといった形で、問題の解決や早い意思決定を図っていた。

人々は、山積みとなった問題を前に、独力で解決しようと考えたり、単にやり過ぎたりしようとするだけではない。他者とより柔軟な相互作用をしながら意思決定をしようと考えているのである。